

寄稿

バトラー先生と私

森岡茂夫

Shigeo Morioka

ILC日本顧問

彼の急逝の第一報は7月6日朝の大迫さん (ILC-Alliance事務局長) からのメールであった。余りにも意外で信じられず、まさか、とメールを何回も読み返していたところ、小室さん (元山之内製薬、NY駐在でILC設立に関わり以来彼と親交があった) からの電話で悲しい現実と知った。ご家族以外には誰も病氣だった事は知らず、その衝撃は彼を知る世界中の人々に走った。

またNY Times、Washington Post、Los Angeles Times、CNN Healthなどの有力メディアは“Father of Modern Gerontology”、“Pioneer in the Study of Aging”と彼を讃え、彼の略伝を大きく報道した。彼の急逝はILC-AllianceにとってGreat Lossだが、早々に彼の遺志を戴しILC-Allianceを発展させようと各理事長と確認し、他方ILC-USAの理事会に後任理事長の早期選任を求めている。

1987年秋、朝日新聞社主催で論説委員大熊由紀子さん(現在、えにしの会代表など多方面でご活躍)ご企画の、彼が特別講演者として招かれていたシンポジウム「高齢化社会を考える」後の小宴で隣合わせたのが、彼との出会いであり、国際長寿センター設立のきっかけでもあった。

老年学、高齢者問題で世界の先駆者であるバトラー博士が、全く畑違いの一介のビジネスマン、しかも初対面の私に、「自分はAgeism (彼が1968年に作った言葉)、即ち高齢者への偏見と差別を無くそうとし、Productive Agingを提唱してき

ている。高齢者は例えば、労働、ボランティア活動、地域活動、学習活動、趣味を楽しむなどの活動が出来るProductiveな可能性をもった存在であり、これらの活動が可能な社会づくりをしようと考えている。その為に日・米で共同して研究・調査・提案・啓蒙する民間の機関を作ってはどうか」との提案があった。

私は、お金は民間、政策は国主体、と考え、これはナショナル・プロジェクトだとの思いで、当時の厚生省老人福祉部の多田部長さん(直後に転任)、岡光部長さんにご相談し、ご理解、ご指導、ご支援をいただけることになった。そして、ニューヨークではジェットロに出向されていた山崎史郎さん(現内閣総理大臣秘書官)と山之内製薬の小室NY駐在員とバトラー博士、そして日本では岡光部長さんと私との5人で設立への具体的な検討を進めた。この間バトラー博士は設立のバックアップのため来日され、津島厚生大臣(当時)をはじめ多田、岡光両部長のほか、関係者、有力な支援企業を訪問するとともに、所沢の日本社会事業大学の伊部英男理事長とも親しく懇談された。

その後ILC初代理事に伊部英男氏、理事も内定、私の社業を通じて懇意な有力な各企業からご理解ある多額の基本財産のご寄付を、また80余の企業から毎年の賛助会費をいただける



2003年、ILC年次総会(ニューヨーク)での博士と筆者

目途がつき、日米間の契約、日本センターの規約、事務所(当面山之内社内)、職員なども順調に決まっていた。そして1990年11月(米国は10月)に日本センターは設立、お蔭様で今年、20周年を迎えることになった。

この23年間、畑違いの私を温かく、親切にご指導、ご厚誼を戴いた事に心より感謝申し上げます。昨年パリの総会において、日本センター長を辞任すること、これが最後の総会への出席であることを告げる私の挨拶に対し、人間として最高の人物である彼からの心からの惜別の言葉と晩餐会での讃辞に私は思わず感涙したことを思い出す。パリでは以前と変わらず元気であったし、しかも私より5歳も若いのに先立ってしまわれるとは思ってもかけない事だった。“Hi, Shigeol!”と話しかける彼の声が聞こえてくるようだ。

私は謙虚・誠実・信頼が洋の東西、時代を問わず人間関係の基本であり、物差しだと思っている。

彼の第一印象は23年を経た今日も変わらない。誰に対しても心温かく、寛大で謙虚、誠実で、先見性に富み、独創的で、口も、筆も立つ偉大な先覚者であり指導者であった。

私の人生の2人の師：1人は山之内製薬(株)(現在アステラス製薬)の創業者である山内健二会長、もう1人が国際長寿センター創立者、バトラー博士だ。2人の最高の師に恵まれた人生に有難いことと感謝するばかりである。

Bob, See you again!